

甲乙の矢

表の広間の声が一段と賑やかになったようだ。弘安四年の正月のことである。入来院三代の当主公重の妻春は、厨で年賀に参上して来る縁戚や重臣たちに振る舞う膳や雑煮の支度に忙しかった。内働きのきわ、まち、とみの三人の女たちに指示を与えながら、彼女は自分が顔を出す頃合いを計っていた。

夫より七歳年下の弟有重の一際高い笑い声が聞こえる。春はその有重の笑い声がいつものように厨にいる自分を意識してのものであることを知っていた。女たちに膳を運ぶ手筈を整えるように伝えて、春は髪や襟元を正して広間に出た。二十人ほどが公重を囲んで雑談をしている。

「おめでとうございます。皆さんお若くおなりですね」

この地方では、新年に年を取る（年が増える）ことを年を取り去って若くなったと言う洒落を挨拶としている。

春は挨拶を済ますと、手早く楕円の車座にと人々を移動させた。間をおかず鮎の干物と大根の煮つけ、煎り豆、干昆布に素焼きの杯の膳が運ばれる。春は有重の視線を意識はしながらも、伏目がちに女達を差配して、各人の杯に酒を注がせていた。春が嫁いでから十五年、何も変わらぬ正月のように見えるが、広間にはただならぬ気配があった。

日焼けして見るからに骨格の逞しい公重は頬に黒々と八の字を描いている髭を指先で軽くしごいた。そして杯を掲げると、一同を見回して言った。

「いや皆元気に正月を迎えることが出来てめでたいことじゃ。わしもおかげで三十八歳を迎えることが出来た。しかし皆も聞き及んでいることと思うが、今年はまだ異国合戦が起こるといことじゃ。辛い年になりそうじゃのう。ま、今は今日のこの日のあることを有り難く思い、心を籠めて子孫の繁栄を祈ろうぞ。いざ」

一同は公重にならって杯を干した。皆の最大の関心事は異国合戦すなわち蒙古軍の襲来である。参戦する迄もなく終わった文永の役から六年は経っていた。しかしこの所何やら再来襲の噂がしきりである。雑談でざわめきながらも、何か新しい情報があるのではないのかと一同の注目は公重に集まっていた。

三十年ほど前、祖父渋谷五郎定心は三人の兄、一人の弟とともに関東から地頭として薩摩の川内川沿いに下向して来た。その渋谷五兄弟は、それぞれ東郷、祁答院、鶴田、入来院、高城をその地を根拠地とした。祖父定心の地は入来院であった。公重五歳の時である。

地頭職を得たといっても、現地には以前からの勢力があり、祖父や父、はたまた伯父たちの異郷での苦勞をつぶさに見てきた公重であった。家督を譲られてから十五年。父明重の死後十三年。長男として彼はよく一族の和を保ち、勢力の定着を計って来た。田畑も一段と広く開墾され、ゆとりも生まれてほっとした矢先に蒙古襲来の文永の役である。彼ら地頭に異国警固番役、石築地役などの賦課が重くのしかかっている。しかも戦となれば、出陣も余儀ないことで

あり、その折の要請も鎌倉より度々受けていた。

一献酌み交わすと、春が促されて公重の隣に座った。ざわめきが静まり、皆正座した。春は背筋を伸ばして声を張り上げて唄った。

霞棚引く雲井より
春立ちけりな天の戸の
明ける景色も閑にて
鶯誘う春の風
・・・・・・・・・・

高くはないが艶やかな声である。公重は満足気にうなずきながら聞き入っていた。病弱な次弟重高、山口家を起こした実直な三弟篤重の次に座っているのは、大柄なゆったりした雰囲気のある四弟の有重である。白晳の面に太い眉。彼はしばらくじっと目を閉じていた。先程までの磊落さは消えて、臉にはうっすら涙がにじんでいる。彼は正月恒例の春のこの歌もこれが聞き納めになるであろうと、ひとしおの感慨をもって聞き入っていたのだ。

三十一歳を迎えた有重はまだ妻を娶っていない。いざ異国合戦ともなれば、兄公重の名代として有重が総大将となり入来院家の家臣を率いて出陣することになっていた。

酒を注いで回っている女達の最年長のきわが有重の膝を叩いた。

「ほら、もう一献過ごされませよ」

この兄弟たちの母、久の小間使だったきわは、赤ん坊だった有重をよく背中にくくり付けられたものだった。きわがまだ十五歳の頃の話である。彼女は色白で悪戯そうな目をした幼時の有重を特別に可愛がった。その下の三人の弟たちの守もしたが、その偏愛は久に注意されるほどのものであった。きわは有重の心が久しく春にあることをよく知っていた。

湯気の立った里芋と青菜の雑煮が運ばれ、談笑がしばし止んだ。その後は酒の酌み交わしとなり座は乱れて来た。酒徳利を手にしたまちが有重の近くにすり寄って来た。有重は公重の隣にいた公重の子の初童丸を手招きして呼び寄せ隣に座らせた。初童丸は十二歳を迎えた。

「どうじゃ。お母上のお唄を聞かれたか。何度聞いても素晴らしいお唄よのう」

まちの酌を受けながら、遠くを見るような目で有重はつぶやいた。一番若いとみが素早く初童丸の膳を運び、二人の前に座った。瞬間、まちととみの間に小さな火花が散った。

十六年前の文永二年のことであった。父明重は長男公重の婚儀の後、彼に家督を譲ることを明らかにしたのだった。花嫁は、明重の従弟で川内川下流の妹背城を根拠とした高城重郷の妻初の妹の春と決められた。姉妹は重郷の関東からの家臣の娘であった。祝言は簡素ながら厳粛で印象深いものであった。

衝立の影に控えていたきわは、春を見つめる十六歳の有重の興奮した面持ち

にふと気づいた。はっとした彼女は、有重の眼になった気持ちで改めて春を眺めた。

揺れる篝火の明かりの下に、雛のように若い二人が座っていた。浅葱色の着物に白い絹の打ち掛けを着て、緊張して伏目になっている花嫁のふっくらとした白い頬を、火影が浮かび上がらせている。それはきわにも溜め息が出るほど美しいと思えた。

明重は公重に家督を譲ると、七人の息子たちそれぞれに所領を分け与えたが、特に有重には入来院清色郷の五分の三と他に相模国や美作国の所領などを与えた。弓も馬も上手にこなし、明るく闊達な気性の有重には何かしら華やかな雰囲気があり、女子ばかりでなく家臣たち誰にも好かれていた。

その有重がどうしても春には素直な対応が出来ない。彼女の前では立ち居振る舞いもぎこちなく、声も喉につかえてしまう。

祝言の二年後の冬に長男の長徳丸を早世させて、悲嘆にくれる春に、有重は射止めた二羽の雉を持参したことがあった。二三日して彼はきわに雉を食べてもらえたかをそっと確かめた。きわは大げさに

「大層お喜びでしたよ」

と告げた。有重はきわが自分の思いを知っているの答えだなとは思ったが、それでも半分ほどはその言葉を信じた。

きわは、一緒に奥向きの仕事を勤めるまちに有重の相手をするように仕向けた。まちは春と同一年、有重より二歳年上である。色白とは言えないが、健康的な血色のよい娘で、よく働くし快活な娘である。まちは次第に弟に対するような口調で有重と冗談を言い交わすようになった。そしていつしかまちは有重のいない世の中を考えることは出来ないと思いつめるようになっていた。

長徳丸の夭逝に続いて明重が倒れ、意識の戻らぬまま三日ほどで死んだ。しかし悲しみばかりは続いた訳ではない。その秋、公重夫婦には初童丸が恵まれた。

初童丸の子守としてとみが屋敷に入った。まだ十三歳だったが、関東から従って来たふた親とも亡くしてしまった。まだ子供ながら進んで甲斐甲斐しくよく働いた。しかしそれは悲しみを紛らわそうとしてのことであつたらうか。人々は時折、ほっそりとした体に初童丸をおぶったとみが、ぼんやり夕焼けを眺めているのを見かけていた。

有重は、折にふれてとみの背の初童丸を覗き込み頬をつついたりしてあやすのだった。とみも有重のおおらかな笑顔に接すると淋しさが消える思いがする。初童丸ばかりでなくとみも彼に懐いた。やがて初童丸が腕白な子供に成長した頃には、とみの思いは熱い恋心に変わっていた。

七年前の文永十年、蒙古襲来の一年前の秋であった。公重が所用で人吉まで出掛けている間に強烈な台風に襲われたことがあった。

夕刻の怪しい雲行きに有重は急ぎ登城したのだった。彼は留守の女たちに声を掛け元気づけながら、下働きの男たちを督促して、屋外の物を片づけたり、

屋敷の雨戸を打ちついたり怠りなく備えた筈であった。しかし夜半、暴風雨は斟酌することなく襲って来た。まず玄関の戸が弓なりにきしみ、男たちが背や胸を当てて支えた。厨の戸は初めは三人の女たちが押さえていたが、彼女たちも恐ろしくなって柵の下に身を潜めた。

有重は初童丸の名を呼びながら奥の間に入った。嚴重に打ちつけておいた筈なのに一カ所が軋み、春が一人で押さえていた。初童丸は空の櫃の中に夜着を被って丸くなるよう春に命じられていた。有重は闇の中にほの白い影を見て駆け寄って軋む戸を押さえた。

春の髪が有重の右頬をかすめて揺れていた。彼の右手は春の頭上の戸を押さえ、顔こそそむけていたが、春の左肩は彼の右の胸の下にあった。春は声も立てず、じっと動かなかった。ひとえの衣を通して弾力のある感触と温かさをお互いに感じた。二十三歳の有重は全身に電流が流れるのを感じた。

それはほんの三分ほどの間だったろうか。春の胸は全身の血が逆流するのではと思われる程激しく鼓動していた。風の唸り声の中、二人には永遠とも思える時が流れた。やがて近づいて来る人声と足音が聞こえ、春ははっとして身を引いた。

その後、春はあの折の胸の鼓動と興奮が何であったかと思い返した。身を避けなかったことに後ろめたい気持ちは全然なかった。そして春は稲妻のように、長い間心の底に潜んでいた有重への思いに気づいたのであった。

それからの春はその気持ちの無意識に表れることを恐れ、おくびにも出すことのないよう気を遣った。ただ見えぬ神経の糸が彼と彼の思いを常に察知していた。それは有重も同様だったとも言えよう。

有重は初童丸を可愛がった。釣りや蟹取りに連れて行ったり、馬と一緒に乗せては清色川の川べりを逆上ったり下ったりするのだった。そして初童丸と声を合わせて大声で笑うとき、自分にはこの時が一番の幸せなのだと思底では泣くような思いで感じていた。

敵の準備の様子などが伝えられた前年の弘安三年の初夏、公重は幕府から出兵の要請のあった折には、入来院からは有重を大将として出陣させることとした。そしてその旨を有重に伝え、心構えをしておくようにと言った。

四月になって高麗の軍が動き出したとの報を得た鎌倉幕府は、守護の島津久経を通じて九州の武士に動員を掛けた。久経は、はじめ鎌倉にいたが、前回の文永の役のときに薩摩に下向して守護の任務に着いていた。

渋谷氏の各家にも多くの人数が割り当てられた。一同は串木野に集結して船で北上する手筈になった。

公重は有重の他に四番目の弟致重と六番目の弟重尚も家臣八十三人に加えた。死を予感した有重は、父から譲られた入来院、相模、美作の所領の全てを初童丸に譲ったのであった。

準備も慌ただしある日、有重は父から貰った碁石を初童丸にと持参した。彼は、その日は公重の留守であることを意識していた。

春は碁笥を受け取ると、礼を述べて自分の部屋に招き入れた。彼女は有重と視線を合わせることを恐れるように終始伏目がちであった。棚の手箱から手縫いの二本の鉢巻きをゆっくり取り出すと無言で彼に手渡した。あの夜の夜着を春が丹念に洗って熨斗をかけて作ったものだった。白地に細い水色の縞が入っている。春はこれが彼の知っている唯一の自分の感触なのだと思います、一針一針に生還を祈る心を込めて縫った。この布が兜の下で彼を護ってくれますようにと。

一目で有重はその布地の何かを知った。彼は無言で深く頭を下げ、押しただいて胸に仕舞って、静かに下がった。春は、受け取った碁笥から白黒二個の碁石を取りだし、自分の守り袋にそっと入れた。そしてこれが形見になるのだろうかと思ひ心に思った。

五月三日、村の中央にある高台、中野原で壮行会が開かれた。入来院一族を挙げての催しである。沢山のかがり火が赤々と燃え、それぞれの武士の旗指物が立ち並ぶ中、全ての家臣が集合した。出征する者の家族や知人や家来、村人など二百人近くも旗指物の影から遠巻きに見守っていた。

公重は春を伴って兵士たちの中央に立っていた。彼は、大きな瓶の酒を杓で掬って有重の杯に注いだ。

「必ず敵をくい止めて、日本の国を護ってくれ。頼んだぞ」

公重はじっと弟を見つめた。公重も幼時の有重を可愛がって、竹とんぼや竹馬など作ってやったものだった。万感の思いを籠めて有重は兄を見た。夫の横顔を見つめながら、春はふと自分の胸の鼓動を夫も知っていたのではなからうかと思ひ思った。

「兄上、お任せあれ。必ずや家名を上げる働きを致しまする」

致重、重尚も杯を手に有重に続いて飲み干した。家臣たちも次々に続いた。高らかな哄笑もあちこちで起こり宴もたけなわである。するするときわが有重に近寄って言った。

「何かお形見を下さりませ」

有重は手にしていた杯をきわに渡した。まちととみも駆け寄ってねだった。

「いや、何も持ち合わせてはおらぬ」

手を振る有重にまちは縋った。

「そんな無情なことをおっしゃいますな。ではこれを頂戴いたします」

まちは有重の左袖を掴まえた。笑って有重が右に身をよじるとそれはメリメリと引きちぎれた。とみが「私にも」と右袖を引いた。「これはたまらん」

有重はカラカラと笑った。周囲の者たちも剥き出しの二人の熱い思いの発露を温かく笑いで包んだ。

三日月はとうに沈んでいたが、満天の星が降るような夜であった。有重は二本の矢を取り寄せて、墨で矢羽根の下にグルリと一本線と二本線の筋を書いた。酒が入った有重の赤い顔をかがり火が照らしている。

「各々方。出陣を祝っての宴、誠に有り難く思うぞ。ただこの異国合戦は船と

の戦いじゃからのう。山国育ちの我々が生きて戻ることは難しいことであろう。これは私の願いで、是非聞いてもらいたい」

大声で話しながら有重は二本の矢を頭上に掲げた。

「今からこの二本の矢を射る。この一本線は甲の矢とする。こちらは乙の矢じゃ。いいか。この甲の矢の着いた所に寺を建てて、菩提を弔ってほしい。乙の矢の落ちた所には神社を建てて祀ってほしい。何も残すもののない私のたつての望みじゃ。聞き届けてくれるか」

「おう」

と居並ぶ人々が答えた。春は密かに二人の下働きの男に甲、乙の矢を追いかけるようにと命じた。

片肩を脱ぐまでもなく、有重の両袖は既に無い。人垣を二分するように手を振ると群衆はさっと別れて矢の道を作った。有重は甲の矢をつがえ、きりきりと弓を引いた。そして黒々と浮かぶ東南の森を目掛けて、はっしと射た。ばらばらと追いかける群衆もいたが、春の命で馬で待機していた二人の男がそれをさえぎった。そしてその一人がさっと馬で矢の方向にある草むらに駆け込んだ。しかし高台からの矢は風に乗って運ばれ、夜目には見つからなかった。

二本目はやや東寄りに放たれた。これも川原の葦の間に落ちたらしく、着地点は外からは見えなかった。

「明るくなってから必ず見つけ出させます。お約束は絶対に守りましょう。でもまずは生きてお帰り下さることが第一です」

春は有重に言った。

一夜明けた。まだ東の空が白々として来たばかりなのに、川原には鎌を手にしたまちととみの姿があった。二人の男たちもいた。

「まち様、ここにございますよ」

一人の男が指さした。まちが駆け寄って引き抜くと乙の矢であった。

とみは確かこの方角だったと一人で丈の伸びた草を払っていた。そして遂に石に当たって地に落ちている甲の矢を見つけた。男たちはそれぞれの馬に矢を手にした女たちを乗せて、晴々とした顔で屋形に戻ったのだった。

春は二本の矢を手にするといそいそと公重の所に走った。

「前川内川（まえこうちがわ）の川べり付近にあったようです。でもあそこはよく氾濫しますから建物の建てられるところではありませんね」

「前川内川と後川内川（うしろこうちがわ）の東側なら大丈夫だ。有重に確約しよう」

公重もほっとした様子で言った。

明けて五月五日の早朝、一隊は串木野を目指して出発する。きわ、まち、とみの三人の女は丹念に干した特製の乾し飯の袋をこれまた特製の布袋に入れて有重に差し出した。有重はにっこり笑って受け取ると、その袋を鞍の前にくくり付けた。

公重夫妻は門の外で見送った。大勢の家臣や村人たちが見送りに道沿いに並ぶ中を一行は進んだ。

島津氏を初め、渋谷一族もそれぞれ精一杯の出兵である。船出の地の串木野は一時は大変な混雑となった。有重は注文しておいた船二艘を受け取り、一隻は自分が大将に、もう一隻は致重を頭として分乗することにした。

五月十日の朝、一斉に船出である。

百万の

敵に卑怯はとらねども

串木野港を出る時にゃ

男涙をついほろり

串木野さのさ節の一節である。串木野さのさ節の発祥は、元寇の折の兵士たちの見送りにあるという。

水夫たちを雇ってのこととはいえ、慣れぬ船の旅は体に応えるだろうと残った者は旅を案じた。やがて心配は戦況に移った。五月下旬には敵は壱岐・対馬を侵しているとの報が入った。そのうち江南軍という物凄い大軍が壱岐を目指しているとの報も入った。こうしている間も、彼らは異国の兵士たちと海上で慣れぬ戦をしているだろう。もしかして命を落としているかもしれない。重苦しく長い日々が続いた。

六月も終わった。南国の強い日差しの下で蝉がけたたましく啼いている午後のことであった。不精髭によれよれの上着を着た兵士が、馬で駆け込んで来た。公重も春も不吉な予感を持って出迎えた。やはりそれは全員の死を伝える知らせであった。

「有重殿をはじめ渋谷のご一党様は、六月二十九日、島津久経様の軍とともに壱岐で果敢に戦われましたが、衆寡敵せず・・・」

伝令役の男は声を詰まらせた。

「えっ。それで有重はどうじゃった」

男は首を振った。

「致重は？重尚は？」

たたみかけて聞く公重に全て首を横に振るのみだった。

六月二十九日の海戦は暴風雨となり、元軍の船はことごとく破壊、壊滅したのであった。そんな戦乱の中、入来院三兄弟をはじめ八十余人全員が死亡したのであった。

公重は、乙の矢跡として寺から五百メートルほどの所に若宮大明神を建立して、弟たちの木像を祀った。

また、公安七年、甲の矢の跡として村の中程に雪松山慈光寺を創建し、有重の墓を建てた。

以後、長い間、慈光寺の墓前にも若宮神社にも香華の絶ゆることはなかった。

若宮神社は明治三年、寺社領返還に伴い、関が原で戦死した入来院十五代重時を祀る重来神社に合祀された。武家屋敷群のある麓地区の入口手前の石段を

上った山上に、戦後建てられた重来神社の簡易な社がある。戦前や戦後の一時
期は祭も賑やかであったが、今は訪れる人も少ない。

慈光寺は、明治になって、廃仏毀釈の嵐の中、入来村の他の七寺とともに消
えた。

しかし寺の後方の山中に有重二十年忌に建てられた有重供養塔は、苔むし上
部は損壊されてはいるものの、珍しい中世多宝塔として現存している。